

研究 報告

ダイズの子実吸汁性カメムシ類の被害低減に向けた埼玉県での取り組み

埼玉県農業技術研究センター さか酒 い井 かず和 ひこ彦

はじめに

ダイズの高品質安定生産に際し、病虫害の適切な防除は極めて重要である。子実を直接加害する害虫としてマメシンクイガ *Leguminivora glycinivorella* (Matsumura) やダイズサヤムシガ *Matsumuraeses falcana* (Walsingham), シロイチモジマダラメイガ *Etiella zinckenella* (Treitschke) 等のチョウ目やダイズサヤタマバエ *Asphondyla yushimai* Yukawa et Uechi のほか、子実吸汁性カメムシ類があげられる。カメムシ類の多発生による吸汁害は、子実収量・品質の大幅な低下という直接的な被害に加え、同化産物の転流先である子実が減少することにより茎葉に養分が残り、ダイズが成熟期に近づいても黄葉や落葉をしない「青立ち」の原因となる(図-1, 2)。「青立ち」により茎葉の水分が低下しない状態が保たれることから、コンバインによる収穫時に圧搾された茎葉から水分が飛散してダイズ子実表面に付着し、そこに土や埃等が付着して「汚粒」が発生する。汚粒により子実の外観が悪化し、農産物検査における下位等級への格付け理由となる場合もあり、機械作業体系上も子実害虫の適切な防除は不可欠である。

埼玉県でも近年は子実吸汁性カメムシ類の発生が増加している(図-3)。主要な加害種はイチモンジカメムシ *Piezodorus hybneri* (Gmelin) およびホソヘリカメムシ *Riptortus pedestris* (Fabricius) で、これらに加えてクサギカメムシ *Halyomorpha halys* (Stål) やブチヒゲカメムシ *Dolycoris baccarum* (Linnaeus) の発生が見られる(図-4, 5)。また、2020年にはミナミアオカメムシ *Nezara viridula* (Linnaeus) の発生が確認され、その後、発生地域の拡大も認められている。

近年、本県のダイズ収量は10a当たり100kg程度と低迷している(埼玉県農林部, 2022a)。多雨や干ばつ等の気象災害や播種作業の遅れ等による減収が大きいと

The Study to Reduce Seed Damage by Soybean Stink Bugs at Saitama Pref. By Kazuhiko SAKAI

(キーワード: ダイズ, 子実吸汁性カメムシ類, 播種時期, 薬剤散布, 防除効果, 子実収量)



図-1 ダイズの青立ち(黄葉期)

画面左側は適切な防除により順調に黄葉しているが、右側はカメムシ類の激しい加害により子実が減少し、黄葉が進まない(2020年10月20日)。



図-2 ダイズの青立ち(落葉期)

6月下旬播種。手前は4回防除区、奥は3回防除区で、両試験区とも成熟期が近づき順調に落葉しているが、画面中央部の無防除区は青立ちとなっており茎葉が緑色を保ったままである(2020年10月29日)。

考えられるが、子実吸汁性カメムシ類による被害も収量低下の一因として指摘されている。本県農林部ではダイズの生産振興に力を入れており、当センターでも病虫害の適切な防除に関する研究を実施している。その中で子実吸汁性カメムシ類による被害低減を目的として播種時